

8月のことば

教え② ～日本の技術・教えの原点

① 10年程前の夏に、琵琶湖畔へ出かけた。その際、「藤樹庵」と書かれた公園の様な所を見付けた。そこで、昔、学校で「中江藤樹～江戸時代初期の陽明学者。」と無機質に習った試験用のワードを思い出した。

しかし、この中江藤樹という人物は、年を負う毎に我意中に偉大である事の認識が膨らむ。

* * *

② 藤樹は1603年に近江小川村で武士の子として生まれた。

当時、「武士は戦いが主、学問は軽視」という戦国時代の気風が残っていたが、彼は「人としての学問こそが、世を平和に治めるものである」との信念を持ち、行動する。

やがて、聖人との噂が広がり、郷里の近江で私塾を開くと、全国から優秀な人材が参集。この時点で彼は己の信念が正しかったことを実感し、世直しの大志を夢見る。

* * *

③ しかし、この入門希望者の中に、大洲(愛媛)から来た大野了佐という若者がいた。

彼は全く物事を覚える事ができず、その父は藤樹に「息子はダメなのは分かっているが…一度習い事のまねごとをしてやってくれないか。」と頼む。藤樹は親心を汲んで引き受けるが、了佐は、聞きしに勝る物覚えが悪く、入門書の冒頭の一行を覚えるのに、午前10時から昼食抜きで午後4時まで繰り返しても、夕食を摂ると全て忘れてしまう有様だった。他の弟子が「了佐一人だけを教えないで下さい」と文句を言うが、藤樹はこの出来ぬ了佐を愛を持って幾度も幾度も教え続ける。

了佐はたまらなくなつて自分の頭をガンガン叩き「申し訳ありません。なぜ私はこんなに頭が悪いのでしょうか!」と泣きわめく。

しかし、藤樹は「私の教え方が悪いのだ!」と言い、又繰り返し教える。

これを半年、一年と繰り返すうち、藤樹はとあることに気付く。

それは了佐が“医学”の事についてはわずかだが反応する、という事である。それで藤樹は自身も医学の勉強をし、(なんと!)了佐一人の為だけの「医学早わかり手引き」を完成させた。

しかし、疲れがたたり藤樹は志半ばで倒る。没年41歳。

* * *

④ 了佐は、故郷の大洲に戻り、名をオゼキユウアンと変えて医者となった。そして誰よりも親切で誰よりも丁寧に人を診た。だから地域の人々の尊敬を受けた。それで、甥が了佐に憧れて医者を志した。

了佐は、かつて藤樹先生が自分にしてくれたように“医学早わかり手引き”を出して教えたが、77歳で没す。

しかし甥は宇和島藩の藩医となり、現在の医学の家系の祖となる。

又、“医学早わかり手引き”は以降、医学を志す人達の教科書となる。(『捷徑医筈』)

これが、日本の師弟の学問・技術へ取り組む姿である。

全ては近江小川村の藤樹と了佐の教えと学びのなかにある。